

2021 年度アジア政経学会共通論題

「中国共産党の 100 年とアジアの国際関係」

中国共産党 100 年の桎梏

国分良成（慶應義塾大学名誉教授）

（1）本年、中国共産党は創設から 100 年を迎えた。この一つの大きな節目にあたって、中国共産党の歴史をどう捉えたらいいのであろうか。私は次の 3 点を指摘したい。①革命党の体質を保持したままで執政党となった結果、党と国家のいびつな関係が存続している。②党内民主主義の欠如により、指導部の政治権力の問題が絶えず突出している。③政治体制を除いて理念としての社会主義イデオロギーはほぼ死滅した。

（2）中華人民共和国建国後の約 30 年、毛沢東主導の社会主義路線は国民の豊かさを創出することに失敗した。しかしその後の約 30 年、鄧小平主導の改革開放路線にもとづき、中国はたしかに世界第 2 位の経済大国にまで成長した。だが、共産党独裁の中途半端な市場経済により、政治腐敗と成長鈍化に悩み、社会主義的分配政策は限界にきている。中国は国際経済の巨大な一部を構成し、その一挙一動は大きな波及効果をもつ。にもかかわらず、中国は国内の特殊事情や内政不干渉を強調することで、国際社会における新たな価値や公共財を創出することには消極的である。

（3）近年、中国外交は数多くの課題を抱えている。米国、日本、オーストラリアなどとの関係悪化をはじめ、国境を接するインドやベトナムなど 14 か国との間の関係もそれぞれに複雑である。一带一路、上海協力機構、ABRICS、AIIB などの多国間協力でも、当初期待されたような成果を上げていない。また、中国が「国内問題」と強調する香港、ウイグル、チベット、それに台湾は、国際社会の関心と反発の対象となり、「国際問題」となっている。

（4）つまり、中国は国内の安定的発展に必要な平和な国際環境を創り出せていない。なぜであろうか。最大の理由は、中国外交の究極目的が共産党一党支配体制の維持にあり、国内システムと国際システムの合理的な融合を成しえていないからである。中国の場合、一党独裁であるがゆえに外交が内政に左右される度合いが大きい。